

2019年12月30日



分断 — 当惑する当事者たち

翌日、redditの情報によると貿易センタービルで抗議派の集会が行われるというので再び足を運んだ。しかし、時間になんてそこでは集会は行われない。記者達ばかりが身を持て余してぶらぶらとしている。数人、学生と思われる少人数の集まりも見られる。彼らは、高校生ぐらいの年齢の様だ。何故はじめらないのかと訝り、抗議者達が情報交換をしているというアプリ、Telegramを確認する。そこへの匿名の投稿によると、集会の場所を湾仔（ワンチャイ）に移すという。誰となしに、その場に居合せた人々が無言で移動しはじめる。統制者はいない。ただ、ネットで得られた情報で夫々が判断している。現代の抗議活動にカリスマ性のあるリーダーは必要ないのかもしれない。

湾仔の地下鉄の駅に着くと、故障中の設備に視線が止まる。「蛮行により破壊された為、使用不可」との張り紙。

抗議者によるものなのだろう。何故彼らは破壊をするのか。その時、自分にはそれが理解できなかった。政府への怒りの捌け口を見失った結果の過ちなのか。後に分かることだが、地下鉄の運営会社は極度に体制寄りであり、抗議者への不条理な行動、時にそれは暴力でもあったとのことだが、そのような行動が抗議者達の怒りを買い、破壊活動の対象とされたとのことだ。地下鉄の運営会社による組織的な暴力。日本にいると俄かに信じられないことが起きているというのだ。



湾仔の駅でも、結局のところ動きはない。歩いて、アドミラルティ、そしてランカイフォンまで行ってみる。ランカイフォンは、有名な歓楽街だ。バーも多い。日中のランカイフォンでも、チキンを売っているスタンドが、向かいのバーを層の間借りてイートインスペースとしている。合理主義は香港で徹底されているということか。昼間のバーで、チキンを食べながらいると、舞踏家の彼女からのメッセージが入る。会ってくれるというのだ。

駅で待ち合わせる。フェイスブック上の彼女の姿は白塗りの化粧で、素顔がわからなかつたが、メッセンジャーでのやりとりで会うことができた。エスニックのファッションを身にまとつたその出で立ちは、いかにもアーティストだ。1月1日のパレードのスタート地点となるヴィクトリア・パーク。そこを歩きながら香港の状況を語ってくれる。

香港市民にとって、抗議デモは日常の一部になってしまった。若者が多いが、年配の人も決して少なくはない。政府への不満、そして不安が彼らを駆り立てる。抗議デモは鬱屈したエネルギーの放出点となり、周囲の共鳴によってそれは強化される。

今日見かけた設備の破壊に話題が及ぶ。設備の破壊は、デモ隊に偽装した警察によるものだという。果たしてそんなことがあり得るのだろうか。日本人の感覚では、考えにくい。情報はどこから漏れ出し、スキャンダルとなって権力側に返ってくる。そう考えるが故に、権力はそんな意思決定をすることはないはずだ。だがもしも権力者が、情報を統制できると考えているとしたら。情報を暴こうとする人物を特定することができれば、暴かれる事自体をコントロールできるのだろうか。日本の中では考えづらいバランスポイントが中国にはあるのかもしれない。



街を歩いていると、彼女が知り合いらしき女性から声を掛けられる。香港に帰ってきていたのね、といった事を話している。彼女は舞踏の交流を通して、何度も日本に足を運んでいるとのことだ。

「日本人が徹底しているのは、芸術に対する姿勢ね。日本人の舞踏家は、皆ものすごく真剣なの。芸術を愉しむのではなくて、追求してる。交流で日本に行く度に刺激されるわ。」

働き過ぎと言われる日本人の考え方には底流するものなのかもしれない。職に貴賤なし、すべての職業の者が夫々に誇りを持つ。それが職人の文化を育み、モノづくりの国として成長を続けてきた。自律分散した意識主体が社会を支える意味で、その文化は民主主義に通じる。封建主義の頃においてさえ、日本人は主体としての文化を持っていたのだ。

彼女が言うには、暗黒舞踏における肉体表現は、常に創作活動なのだという。それは即興芸術でもあり、一種の実験でもある。例えば、窮屈な箱の中に押し込められていたと想像するとき、あなたはそれをどう表現するのか。そこで表現されるものは、箱の小ささに留まらない。閉塞の悲しみ、解放への希求。箱が暗示するもの、その解釈の可能性。彼女はそれを身体的詩作と呼んでいた。私はここ、旅の地で、日本に由来する芸術の思索に触れることとなったのだ。



彼女が案内してくれたのは、街中のカフェ。

至って普通に見える。

「ここはイエローなの。」

そう、香港で行われている抗議デモは、政府対市民だけではなく、市民をも二分している。街中の店は抗議賛同派なのか、親中派なのかで、イエローサイドとブルーサイドに分かれる。イエローは民主派、抗議者のカラーだ。そしてブルーは親中派。急成長する中国と、その中国にとって香港という貿易上の特異点を活用とする中国政府の政策もあり、ビジネス上は中国の重要性は増す。いまや中国に近づくことがビジネス上の必須条件になりつつあるのだ。従って、ビジネス面から親中の姿勢をとる人々は少なくはない。

イエローとブルー。抗議活動のポスターが貼ってある等、店の様子を見れば分かる場合もあるが、一見わからない場合でも、専用のWebサイトで確認することもできるという。現在の多数派は若者を中心としたイエロー、すなわち民主派が多い。民主派の人々は「黄色経済圏」、すなわち、香港の経済が民主派の思想の元だけで十分に成り立つことを証明したいという思いもあるそうだ。

当然、民主派の人々はイエローの店を使う。ブルーの店を使えば非難されかねない。従ってブルー、すなわち親中派を表明することは消費者向かいのビジネスでは困難な面もある。今では、偽イエロー、すなわち実際は親中派であるのに、民主派を装った店もあるのだという。



ブルーは、警察の制服の色からの連想でもあるそうだ。イエローはその補色だ。

彼女が語る、香港警察の不正。それは、まるでマフィアの所業の様だ。数か月前の8月31日、太子駅（プリンス・エドワード駅）でそれは起きた。デモ隊の排除をおこなった警察は、執拗に市民を追い詰める。「ゴキブリ、でてこい！」と警官は市民を威嚇しながら電車の中にまで追跡し、そして暴行を加えた。一方的に警棒で叩かれる市民の姿がSNSで拡散され、市民は激昂した。さらに警察はその日の重傷者数の数字を、不詳者として突然3名減らした。不明者の家族や友人から連絡が取れないという訴えがでたものの、警察は無視を続けている。市民は3名の死を確信し、祭壇を設けた。



太子駅での
警察による暴行。
この日、8月31日は
香港市民にとって
忘れ難い日となった。

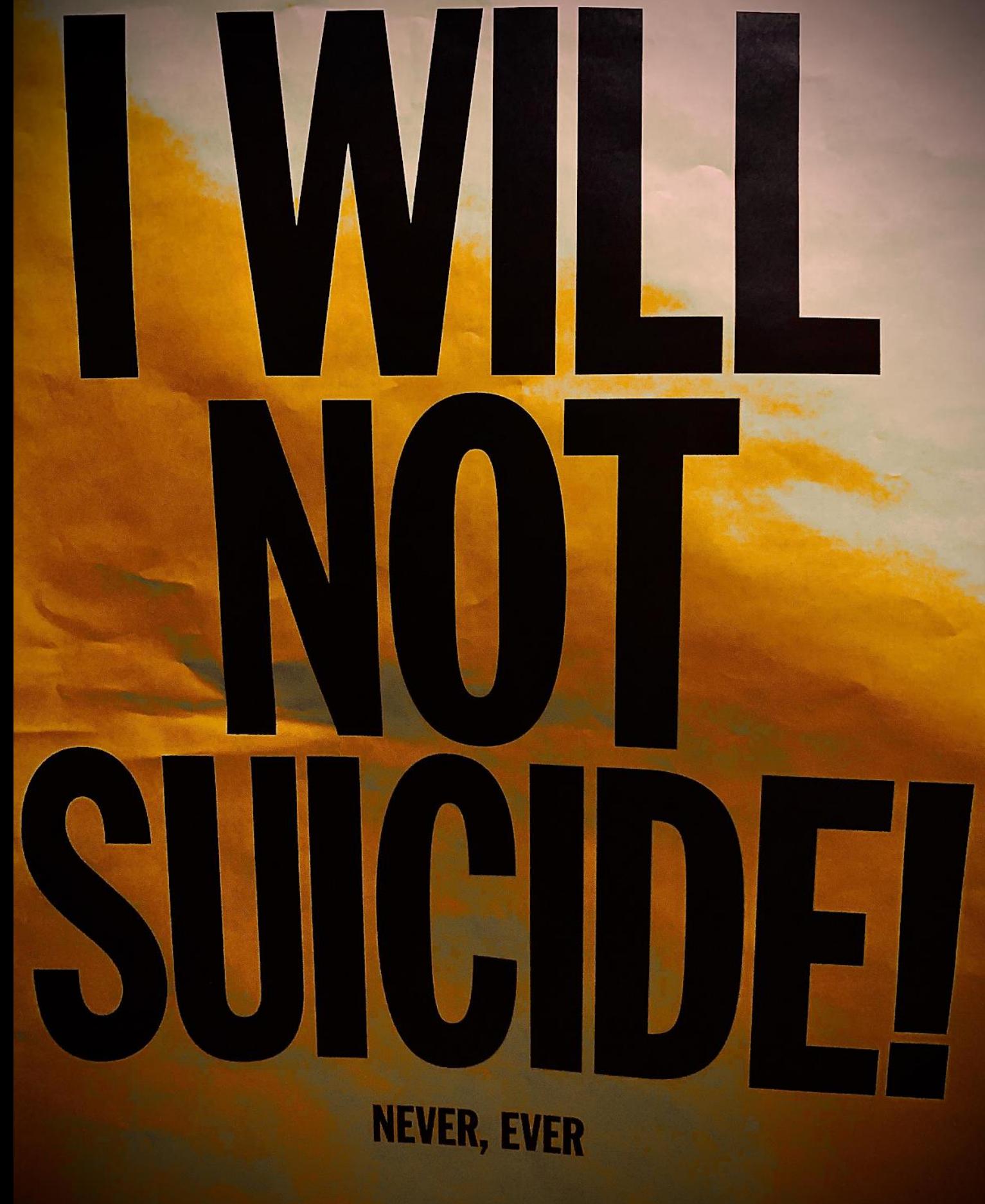
https://youtu.be/wxT6zp_HWSQ

さらにここ数ヶ月、抗議者の中で不審な死が増えているとのことだ。それは警察には自殺として処理されている。10月に話題になったのは、15歳の女子学生が全裸の水死体で見つかったことだ。その女子学生は水泳の選手でもあり、そんな彼女が入水自殺を選ぶだろうか。しかも全裸で発見される自殺というのはどうみても不自然だ。昨日の集会で見かけた女性の肖像画。それは、その女子学生を描いたものだということが分かった。

その時、香港で見つけたあるポスターを思い出した。「私は自殺しない」とだけ書かれた黄色のポスター。私は漸くその意味について理解した。警察はマフィアと変わらない、抗議者達はそう確信している。



「被自殺 — 自殺される」
全裸の水死体で発見された
15歳の少女は、警察によって
自殺であると断定された。
あまりにも多い不審点。
彼女は、抗議者だった。



その日彼女は、別のカフェで開かれる、ある講演会に連れて行ってくれることだった。彼女が最近興味を持っている思想家、羅永生（ラ・エイセイ）。香港嶺南大学の准教授だ。その日は、香港におけるこの抗議運動とハンナ・アーレントの思想の関係についての講演のことだ。

ハンナ・アーレントはドイツ生まれのユダヤ人。1975年に69歳で亡くなっている。ナチスの行動を体験した女性思想家であり、著書『全体主義の起源』により、なぜそれが起きてしまったのか、どうあるべきなのかを論じた。

香港が直面する、中国共産党による全体主義への組み入れ。「チャイナチ」という言葉は分かりやすいキーワードとして、抗議者達に使われている。

そのカフェの名は「ブルー・ノート（Brew Note）」。有名なライブハウスの名のもじりではあるものの、本格的で硬派な空間だ。決して大きな店ではないが、その夜はその店で開かれる文化講演の第24回目のことだ。そこで抽出される声は、生きた思想として抗議者達を支えている。オレンジ色のバルブ・ライトの灯る店内は、革命のオルグの如く抗議者達を一種の陶酔に誘う。

羅永生氏は、かつてより香港の文化的な成り立ちについて語り続けていた思想家のことだ。貿易、そして経済の世界的な拠点としての存在感を持つ香港、そこにあるのはイギリスの植民地という事実だ。1997年の返還は、本来、母国への帰還ではあり、喜ぶべきものであるはずなのに、殆どの香港市民がそれを嘆いている。簡単には紐解けない感情、彼ら自身が言葉にするのを避けているように思われる皮肉。

香港の独立という言葉が、羅永生氏の口から出るも、それは現実的なものではないものとして、すぐに本人によって否定される。では彼らが目指すものは、植民地時代への回帰なのか、あるいは一国二制度の維持なのか。かれらが呼ぶ「革命」、現状維持を訴える革命なんてものは悪い冗談の様だ。

ハンナ・アーレントの述べる全体主義に、中国共産党の唱えるものを重ね合わせるとしたら、その起源とは、中国共産党の出発点となるマルクス・レーニン主義による社会主義革命であることになる。それは、社会的不安を背景に、政治に目覚めた大衆が、耳障りの良い幻想に扇動された結果生み出されるとされる。だが、その起源に相当する状態とは、現在の香港にも当てはまるのかもしれない。自分たちは扇動されやすい危うい状況にあるのではないかという自問自答。危うい論点の上に講演は展開される。

暴力がもたらすものは政治の破壊であり、ハンナ・アーレントの目指す、多様性に裏付けされた自由のある社会をもたらさない。抗議活動の先にある姿を語り、抗議活動のあるべき形、そして自らの立脚点を確立させること。彼らにとってのその道筋は複雑だ。結局のところ、中国共産党に対する反発でしかないものを、歴史を踏まえた裏付けを求めて、苦悩しているように見える。

その議論は、YouTubeで公開されており、PCのブラウザ上で日本語の機械翻訳を通して内容を確認することができる。



後日、そのイベントの報告を行っていたFacebookのページによると、雨傘革命のリーダー、ジョシュア・ウォンもその場で講演を聞いていたようだ。



その後、舞踏家の彼女が友人の集まりに連れて行ってくれることになった。皆、アーティストとのことだ。バスに乗り込む。場所は九龍半島、深水埗(シャムシュイポー)からほど近い、石硶尾(シェッキップメイ)だ。古い集合住宅の様な外観の建物。そこにはJCCAC (Jockey Club Creative Art Center, 賽馬会創意藝術中心)と書かれている。そこはかつてそこは織物工場であったという。集合団地の様な建物の中に、当時390もの織物工場があった。中国への併合を経て、香港の織物産業は衰退し、工場はほとんど中国本土へと移ることとなった。2001年にこの建物は閉館したが、2008年、空いたその場所を芸術空間としてリノベーションしたのだという。

この建物の中では、時折イベントが開催されるものの、アーティストのためのアトリエとして機能している。そこで制作活動を行う多数のアーティスト達。舞踏家の彼女が連れて来てくれたここは、そんなアーティスト達のたまり場だ。

夜中の校舎。そんな趣のあるその建物の中は、静かで人の姿もほとんど見かけない。ただ、多数配置されている作品達が、そこが芸術制作の場であることを語っている。彼女は私を連れ、建物の奥へと歩いていく。そして、その一角に辿り着いた。



JCCAC (Jockey Club Creative Art Center, 賽馬会創意藝術中心)



扉を開けると、笑い声が飛び込んできた。数人の男女がこちらを見た。皆、笑顔が眩しい。年齢は20代、30代ぐらいか。「ようこそ！まあ、掛けてよ。何を飲みたい？」彼女が事前に伝えてくれていたらしく、待ってくれていた様だった。そこはアトリエだった。多数の作品、書籍。その空間にいるだけで、彼らが人生を謳歌していることが伝わってくる。



その中のひとり、そのアトリエの所有者を舞踏家の彼女が紹介してくれた。彼の名はホイチュウ（海潮）。サンド・アニメーション等を手がけているアーティストであり、海外でも複数の受賞歴がある。すべての人を引き込むような性格。ここに集まる仲間は彼が求心力になっていることが分かる。

彼によるライブ・ドローイングの様子を示した動画は圧巻だ。砂という流れ消え去るものに、ひと時宿ったもの。文明、人生、そして命。それらの儂さがその手段により表現されている様だ。



2018年 フランスと香港の共同プログラム、"Le French May" でのステージ。
ホイチュウの手によるライブ・ペインティング。
<https://youtu.be/NM1nGusQYbM>

「私はSAORIをしてる。毎年、日本に行ってるのよ。」

ホイチュウのアトリエに集まったアーティストの中の一人の女性が声をかけてくれる。

日本の織物である「裂織（さわり）」、恥ずかしながら自分は知らなかった。人の名前かと思い込み、会話を繋ぐが要領を得ない。彼女は丁寧に教えてくれた。

裂織は城みさを氏が1969年に始めた織物手法だ。はじめは手織りの際のミスがきっかけだったが、その不揃いの魅力に気付いた時、それを織物として追求し始めた。



不揃いの糸で手作業で紡がれる、彩鮮やかな織物。その過程は工業化で失われたもの、あるいは画一化からの回復だ。技術の追求には奥が深くとも、技術のない初心者であっても制作者自らが感動するような作品をつくることができる。それは、自己の肯定をもたらし、誰もが芸術の力に触れることができる。

その創作活動自体が人々に癒しや救いを与える。その可能性に惹かれているのだと、彼女は語ってくれた。ハンディキャップを背負った人々も含めてワークショップを開催し、そのインストラクターとして活動しているとのことだ。



別の一人は、今は主に抗議活動をテーマにした作品を作っているそうだ。彼らアーティストも他の若者と同じく抗議活動には賛同している。そんな中で表現活動を追求しているとなれば、彼等は常にこの抗議活動に対するスタンスを求められている。そこには複雑な感情があるようにも感じられた。

そしてホイチュウが差し出してくれた一枚のポストカード。現在の抗議活動が最も拡大した6月頃に彼が制作したものだ。綱渡りをする男性が描かれている。彼の背負っているのは様々な感情だ。怒り、恐れ、戸惑い。そしてその男性の顔にはピエロの鼻。これらすべての感情はどれも偽りがないが、それを明確に制御出来ない事実に対峙し、当惑している。制作活動は自分の精神の分析でもある。アーティストにとっての抗議活動というものは、いかに複雑で、難解であるか。

アーティストは常に表現を求めている。表現を残すことこそが彼らの目的だ。今、アートがもたらす社会的な側面が問われている。確かにアートには人を動かす力がある。また、裂織のように、人々に救いを与えてくれる可能性がある。今、彼等は抗議活動と彼らの創作活動との関りについて自問自答が迫られているが、本来彼らに抗議活動は必要無いのではないか。抗議活動がなくても、彼らは進むべき道を見出しているのだ。ただ、その抗議活動の只中にいるという事実が、彼らの表現に否が応でも問いかける。それは新たな可能性を見出す貴重な機会でもあり、見出したはずの道への歩みを止める不幸でもある。



2019年12月31日



ヒューマンチェーン —人々の思いの可視化

2019年の大晦日、その夜、香港では恒例の花火による演出が中止となっていた。勿論、2019年の抗議デモによる治安上の懸念が理由だ。香港人、というよりも中国人全体ではあるが、西暦の新年は実際には重要ではない。彼らにとって重要なのは春節、旧正月の方だ。とはいえ、年が変わる夫々の地域における節目となるその瞬間は、世界的に何かイベントをしたくなるものだ。それは、明日、元旦に予定されている大規模な抗議デモしかしり、今夜、大晦日のヒューマンチェーンしかしり。

有難いことに舞踏家の彼女は今日も時間を作つて付き合ってくれることだ。センタラルで待ち合わせた。

抗議の思いで繋がるヒューマンチェーンのイベントに私は期待していた。それがつくりだす光景。それは人の心を動かす表現手段だ。彼女に案内されて、その集合地点に辿り着くと、すでに多数の人々が集まってきていた。トラム、そしてバスの通り道に沿つて、参加者達は並ぶ。連なるスマートフォンの光。通り過ぎるトラムの中の人々がそれを眺めている。

いったいどれくらいの人が参加しているのだろう。残念なのはその全体像を見られないことだ。



先にAIのくだりで触れたとおり、私は普段の仕事の中でデータに関わる仕事をしている。データの持つ意味を分析し、それを可視化する。データ・ビジュアライゼーションの分野において、急成長を遂げたTableau（タブロー）社の創始者の中の一人は、CG作品を生み出すピクサー・アニメーション・スタジオの設立メンバーでもある。実際に、Tableau社製品によるデータ可視化は如何に分かり易く、そして美しくデータを表現するかに拘っている。データ・ビジュアライゼーションがビジネス面においても、そしてアート面においても大きな可能性を持つことを見抜いていたからこそその成功であろう。アートは人の心を揺さぶる。そしてビジネスは勘や経験ではなく、データに基づいて判断されるべきである。そのデータに人を動かす力を与えるものとしてアートはその力を使えるはずなのだ。民主化を願う人々の思いを如何に視覚化するか。抗議デモやヒューマンチェーンはその手段だ。道路を埋め尽くした人だから。夜景の中に灯るヒューマンチェーンの光。その光景 자체がメッセージとなり、見る人の心を捉えるのだ。

日本で行われている「100万人のキャンドルナイト」もその様に位置づけられるのかもしれない。それは日本を起点としたイベントであったが、その原型は、2001年におこなわれたカナダにおける自主停電運動だった。それは、当時の米国大統領ジョージ・ブッシュの発表した、一ヶ月に一基ずつ原子力発電所を増やすという政策に抗議する

活動だった。日本の環境問題に関するNGOがそれに触発され、毎年、夏至と冬至の日、20時から22時までの2時間、電気を消して蠟燭の火だけで過ごし、環境や平和について思いを馳せよう呼びかけた。2003年以来、趣旨に賛同する、忌野清志郎や山崎まさよし等のミュージシャンも参加するイベントとなっており、最近では2019年の夏至の夜、東京タワーに程近い増上寺境内から、その時間におこなわた東京タワーのライトダウンの瞬間を参加者達は共有した。この活動がさらに広がれば、夏至と冬至の夜、人々はあたたかな暗闇のウェーブを景色として体験することができるようになるだろう。

香港デモにおいては、数か月前の8月23日に「ホンコン・ウェイ」と呼ばれる大規模なヒューマンチェーンが開催された。それは30年前の1989年8月23日、バルト三国の市民およそ200万人がソ連からの独立と民主化の意思表示を行った「バルティック・ウェイ（バルトの道）」に由来する。そのバルトの道は、三国を跨る約670kmの長さに達したという。

バルトの道、この抗議活動は、さらに遡ること50年前の1939年8月23日に秘密裡に締結された独ソ不可侵条約において、ヒトラーとスターリンが互いの侵攻範囲を合意したことになんでいる。バルト三国はソ連の侵攻可能範囲として扱われた。民衆不在の場で決められた運命。50年を経て、それに抗う思いが、人間の鎖を作った。



香港における抗議派は、中国共産党支配からの独立というメッセージを引き継ぐものとして、香港市民に参加を呼びかけた。香港各地で人々は手を繋ぎ、スマートフォンを掲げて光の鎖を連ねた。香港を見下ろすライオン・ロックの稜線に現れた光の列。それは香港の夜景に呼応するかの様だ。人を動かすための美しい表現の追求。アートは民主化の手段になるのだろうか。それとも、アートとは、本来それを超越するものであり、政治的なものへの転用は芸術への冒涜なのか。

ホイチュウの葛藤。そもそもそれらは砂の様に儂いものなのではないか。

芸術も、人間の文明も。

彼は見た。多数の文明が生まれ、そして消えていくのを。
ほとんどが静かな水面のような時間だった。
文明はその誕生を静かに待っていた。
ついに世に生まれたとしても、
それは海岸の泡のように儂く消え失せる。
泡の中の声は、時に革命の叫びであったり、
大国の衝突であったのかもしれない。
ただ、それは無数に生まれ消えていく。
大海に眠る文明の行く末。
ただ、その大海さえも、
無数の中の一滴にすぎなかったのだけれど。

(哲学者オラフ・ステープルトンによる1937年のSF、『スター・メイカー』より)



2020年1月1日

20
元旦大遊行
長者
打造行人專用區

2020
元旦大遊行
光復香港
2PM 維園中央草坪 → 遊行示威專用區

2020
NEW YEAR RALLY
FREE
HONG
KONG
2PM Victoria Park (Central Lawn) → Chater Road Pedestrian Precinct

2020
NEW YEAR RALLY
FREE
HONG
KONG
2PM Victoria Park (Central Lawn) → Chater Road Pedestrian Precinct

2020
NEW YEAR RALLY
FREE
HONG
KONG
2PM Victoria Park (Central Lawn) → Chater Road Pedestrian Precinct

2020
NEW YEAR RALLY
FREE
HONG
KONG
2PM Victoria Park (Central Lawn) → Chater Road Pedestrian Precinct

いつもと違う警察 — 元日の抗議デモ

ドミトリーの朝。リビングに座り、眠そうに行き来する宿泊客たちを眺める。おそらくは新年を迎えるパーティで騒いでいたのだろう。2020年、初めての朝。新年の期待は今日のデモへの期待にかき消された。思い渦巻くその中に身を置く。何を感じられるのか。不謹慎だとは分かっている。それでも期待は抑えられない。抗議者への支援を前面に打ち出しているこのドミトリー、宿泊者達の中にもきっとデモに足を運ぶ宿泊客がいると思いたい。彼らの話を聞きたい。

一人の宿泊客が部屋から出てきて、ソファに腰を掛けたので声を掛けてみる。彼はデンマークからやってきたとのことだが、明らかにアジア系だ。ベトナムからの難民としてデンマークに来たのだという。彼は昨日、大晦日の夜をカウントダウンイベントに行ってしたことだ。

今日はどうするのか聞いてみたところ、香港島の大仏を見に行くという。香港に大仏があること自体、私は知らなかった。君はどうするんだ？ そう聞かれたので、デモがあるらしいので見に行くんだと話してみる。街角でみかけたポスターの写真を見せる。デモを呼びかけるポスターを写した写真だ。彼は黙ってじっと眺めている。興味があるなら一緒に行かないかい？ そう誘つてみると彼は視線を上げ、静かに答える。「いいね、そうするよ。」

私たちは地下鉄で、コースウェイ・ベイに向かう。「目的地はどこ？」「ヴィクトリア・パークだよ。ヴィクトリア・ピークではなくて、パーク。」観光地ではなく、市民の集う場所だ。

街には、各所に元旦の抗議デモのビラを見かける。偽物ビラまで出回っている様だ。



UP + DISCOVER / NEWS

VIP / Discover / News / Hong Kong

Hong Kong protests: Civil Human Rights Front says poster calling for acts of vandalism on New Year's Day is fake

The fake poster's design is similar to a real one released by the Front

By Kelly Ho | 13:12pm, 31 Dec, 2019

民陣改圖求割薩 恐嚇民陣涉煽動暴力
民陣：向 A 貨說不，與警暴割薩

2020 1.1 WED 2PM
真 假

Latest Articles

HONG KONG / HONG KONG PROTESTS
Hong Kong's Legislative Council sees injuries as lawmakers fight

HONG KONG / CORONAVIRUS OUTBREAK
EDB notes coronavirus prevention measures before classes resume

Ahead of the New Year's Day march which has been approved by the police, the Civil Human Rights Front cleared up speculation over a poster that called for protesters to take part in acts of vandalism during the rally.

Let's turn back



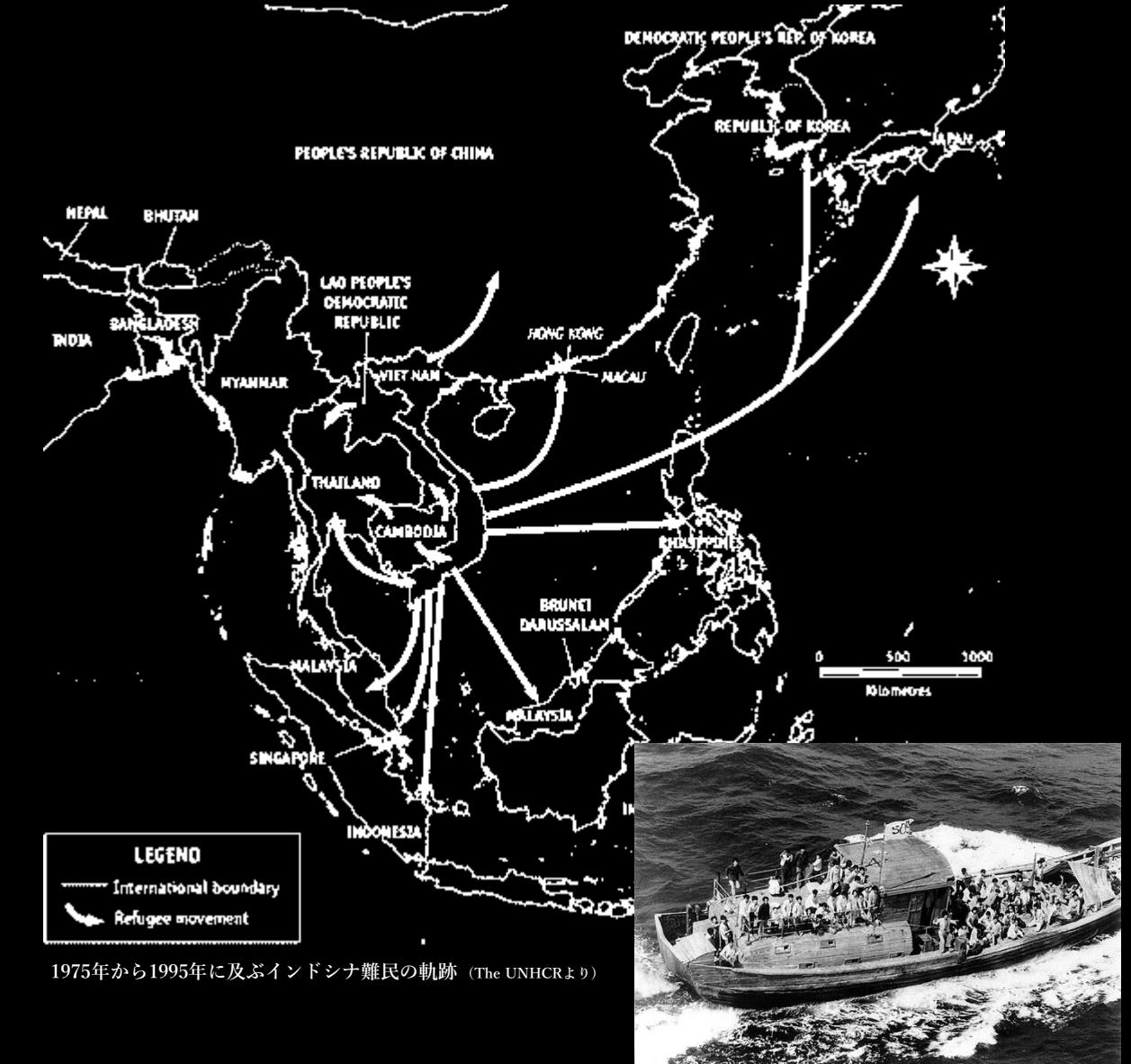
地下鉄の駅の上は、抗議者達で溢れていた。抗議活動のマスコットキャラクターが参加者を迎えてくれる。豚、そして、蛙。皮肉と毒に満ちたそのキャラクターは日本のゆるキャラとは根本的に異なっている。それは、抗議活動という香港のシリアルスさ故か、それとも平和ボケした日本の文化故か。そして参加者達の服装も。黒い服の若者達。黒いマスク。いい？デモに行くときは着替えを持って行くの。プロテスター（抗議者）の恰好のままだと、警察に拘束されてもおかしくない。帰りの地下鉄でも警察に目を付けられるわよ。舞踏家の彼女からもらったそんなアドバイスを思い出す。思慮の足りない私は日本を出る際、意識的に黒い服装ばかりを選んでいた。抗議者達と語り合う、その為には、まずは恰好から彼らに合わせるのだ。間抜けな自分に情けなくなる。そんな話を同行するデンマーク人の彼に話す。

「着替えがあったのは正解みたいだね。」

彼は身に着けていた青いスポーツウェアをしまい、代わりに黒いスウェットパークを身に纏う。リュックの中から、黒いキャップも出してきた。そして、黒いネックウォーマーで口元を隠す。その出で立ちは、本格的な抗議者のそれとなった。僕は驚き、そして、理解した。やはり彼は僕と同じくデモに身を置くことが、彼の旅の大変な目的だったのだ。ただ、その動機は私の動機とは異なっていた。

多数の抗議者は公園に整然と並んでいる。公園内の広場に流れる広東語のアナウンス。統制されたデモだ。そして彼は語ってくれた。彼の職業は金融系のシステムエンジニアとのことだ。彼が香港に来たのはただ単に観光が目的ではない。彼の家族は、ベトナム戦争の際に国を離れ、デンマークにたどり着く前、香港に住んでいたのだという。彼の旅は、自分のルーツを探る旅なのだ。





ベトナム、カンボジア、ラオス。1970年代後半、ベトナム戦争の終結とともに相次いで社会主義に移行したこれら三国から脱出した人々、所謂、インドシナ難民は主に中国にルーツを持つ人々、つまり華僑だ。その数は100万人を越える。海路で脱出した人々はボートピープルと呼ばれた。商船に救助されることに望みを託し、小さなボートで何日間も海を渡る。空腹と渴き、そして海賊に襲われるという恐怖。

資本主義に生きることを決意した同じ中国系の同胞を無条件で受け入れることを、当時の香港は表明していた。

香港は多数のインドシナ難民にとって命をつなぐための目的地だった。

そんな難民のなかに彼の両親がいたのだという。そして彼は香港で生まれ、幼少時代を過ごした。夢の地であった香港。ただし資本主義の現実は想像以上に冷酷だ。貧困と犯罪。当時受け入れた多数の難民は香港において社会問題となっていたという。その香港が中国への返還により社会主義に戻る時、今日、彼ら香港人が選ぶのは小さなボートではなく、抗議デモという社会運動だ。命をつないでくれたもう一つの祖国の運命を見たい。そう思ったのだろう。彼は多くは語らないが、力強い視線が思いの強さを伝えてくる。



“FIVE DEMANDS,
NOT ONE LESS !
FREE HONGKONG !”

広東語のアナウンスの合間に聞こえる、デモの掛け声。抗議者達は皆、片手を上げ、掌を広げてその掛け声に応える。公園の中を3機のドローンが飛ぶ。主催者のものか、それとも政府のものか。抗議者達はマスクで顔を隠している。記録された映像が、今後彼らの人生でどう登場してくるか分らない。デモへの参加の証跡があることが、彼らの人生を制限することにもなりかねない。これだけ多数の人々が参加しているのであれば、膨大な数に紛れて個人の特定などできないのではないか、という楽観論は、AIによる分析が現実的な手法になりつつある現在では通用しない。

集団の歩みは遅く、一向に進まない。時間は3時間以上経っていたが、まだヴィクトリア・パークにいる。

混雑の中、デンマークの彼とは離れ離れになってしまった。メッセンジャーでやりとりをするも、あまりの混雑さで通信もままならない。落ち合うのは困難そうだ。

公園を出ると、抗議者たちは目的地ワンチャイ、そしてアドミラリティ方面に向かい始める。そんな中、市電の線路に沿って、道路の中央に向かい合う2つの列ができていた。ヒューマン・チェーンなのかと思ったがそうではない。彼らは手渡しに何かを先方に送っている。袋、水、傘。次々に先方に資材を送る。脇からも他の参加者が資材をその流れに乗せる。時折、向かい合う2列の間を人が駆け抜ける。そして、どこから持ち込んだのだろう、移動式のバリケードを駆け足で運び込んでいる。道路を進んでいくと、地面の煉瓦が剥がされている風景が目に入る。剥がされた煉瓦も、手渡しの流れに乗せられる。バリケードを作る。道路を封鎖する。これは抗議者のメッセージなのだ。



「今日のデモはいつもより平和的。でも、
日が暮れるころにはいつのもののように
必ずみんなエキサイトする。

無理はしないで。危険なところに
近づかないで。ワンチャイでデモ隊と
警察との衝突があったみたい。

ワンチャイに近づいては駄目。」

スマートフォンに舞踏家の彼女からのメッ
セージが届く。コースウェイベイに暫く留
まって様子を見ることにする。デモ隊の中に
後退の指示が伝わってくる。この統制はどこ
で生まれるのだろう。リーダー不在と言われ
る今回のデモ。ウェブ上の掲示板でデモの詳
細な行動プランが議論されるらしい。

デモ隊は引き続き物資を送り続けている。
手渡しで送られるものは、バリケードの資
材、催涙ガスを洗い流すための水。そして、
失われつつある民主主義への哀悼、政府へ
の怒りだ。

手渡しの行為自体が抗議者としての一体感
を生み出している。手渡しのその先にある
のは、警察との衝突を起こしているデモの
前線だ。



コースウェイベイに立ち並ぶ商業ビルの間に届く日の光が淡くなってきた。暮れ始めた一日。彼女の言う通り、それは吸う息に紛れて魔力のように抗議者を昂揚させる。次第に弱くなる光に反比例して、抗議者の声に強みが増してきている。

日暮れの街の中、私は足を進めていた。20名程の集団が傘をさして何やら隠している。2014年の雨傘運動以来、傘は抗議者の象徴だ。催涙弾から身を守り、監視カメラによる撮影から身を隠す。その傘が今隠しているもの。それは火炎瓶だった。

路上に火が放たれる。人々の足取りが力強くなる。参加者達の視線は前線方向を力強く見つめている。即席で築かれたバリケード。

フェイスマスクをした若者がハンマーで信号機を破壊する。合法であったはずのこの日のデモは犯罪の色を帯びる。





警察による検挙が始まる。合法的な手段だけでは伝わらないものもある、そう語ったのは雨傘運動のリーダー、ジョシュア・ウォンだ。いざそれが目の前で起きているものを見ると、それは冷静なメッセージであるとは思えない。怒りと高揚、そして陶酔がもたらす過ちなのだ。警察に検挙の口実を与えることにもなる。それを罷といふことはナイーヴに過ぎるかもしれない。ただその行為が、若者自身に人生を踏み外させてしまう事自体が悲劇なのだ。

多数の警官が近づいてくる。その姿は私たち日本人が警察に対して持っているイメージからは程遠い。まるで軍隊だ。シールドを翳し、ヘルメットの中の素顔を隠されたその立ち姿には、異様な威圧感を感じる。

大きなシールドを地面に叩きつけて威嚇をする警察官たち。気付けば私の周りは黄色いベストに「PRESS」と書かれた人々、記者達ばかりになっていた。いつのまにかガスマスクをしている人々も増えた。



彼女から、ワンチャイで催涙ガスが使われているとの連絡が入る。炎を上げる路上のバリケード群。次々に車両から降りてくる武装した警察官達。この街はすでに戦場になっていたのだ。

警察が抗議者を威嚇するが、敏感な抗議者達はその場にはもういない。いるのは記者と傍観者ばかりだ。



サイレンとともに散水車が現れる。スピーカーから流れる警察の叫び声。噴出された高圧の水が人々を直撃する。逃げる人々。それを追う記者達。

顔の皮膚に刺すような刺激を感じる。催涙ガスだ。私はガスマスクを持っていない。その場を急いで離れる。裏路地に避難すると、催涙ガスを被った目を洗っている抗議者達がいる。パトカーのサイレンの音が、ビルの隙間にこだましながら吸い込まれていく。



「今日の警察はおかしいわ。デモ自体は比較的おとなしかったのに、警察の動きが激しいの。最近、警察のトップが更迭された。任命された新しいトップが今までとは違うというメッセージを市民に送ってる。」

彼女が教えてくれる。私は、裏路地に面した茶餐廳（ツアツアンティン、喫茶兼食堂）に入り、休憩をとることにした。そこは圧倒的な日常だ。すぐ表で起きているデモとは切り離されたような日常。若者がミルクティーを飲み、年配の男性が一人で野菜炒めを食べている。これが香港の力強さなのか、あるいは日本人も含めた人間の力強さなのかもしれない。例え戦争が起きようと、その一方で継続する日常。ここで少し休むよ。ここは平和だね。彼女を心配させないように写真を送る。





私は疲れ果てていた。非日常の姿、あたりまえの様に日常と並存するその姿に洗礼を受け、俄かな熱と珍しい頭痛を感じていた。人だかりが警察の一団を取り囲んでいた。武装した警官に取り押さえられる抗議者。その様子を覗き込んでいると、警官の持つ、志向性の高い強力なライトを浴びせられ視界を失う。その脇では果物屋が商品の入った箱を路面に並べている。林檎が安い。世界の終わりもきっとこんな風景なのだろう。取り返しの着かない場所を過ぎたとしても、人は、宗教の様に熱心に日常を信仰し続けるのだ。

この日、警察は200人以上を検挙したという。エスカレートした抗議者は、抗議派の資金収集のための口座を封鎖した銀行であるHSBCの店舗を破壊、同様に新中派であり、抗議デモに批判的な企業が香港内でのフランチャイズ展開をおこなっているスターバックス・コーヒーも標的となり、店舗の破壊が行われた。

主催側の発表によると、参加者は100万人を超えたとのこと。一方、警察発表では参加者は約6万人程だ。この数字の違いは何だろう。現代においても、参加者の数すら人間は正しく数えることができないのか。そうだとしたら、デモを実施した参加者の思いはどこへ消えてしまったのだろう。



体を引きずるような思いで宿に辿り着くと、尖沙咀の夜景を望むベランダで、バックパッカー達がビールを飲んでいた。デンマークから来た彼の姿は見えない。私もその一団に加わってビル群を眺めながらビールを飲む。香港市内に立ち並ぶビルはどれも高い。地震の有無、宅地面積の少なさ、日本の景色と異にするのはそんな理由かもしれない。そんなビルの屋上にはペントハウスらしきものも見られる。圧倒的な貧富の差。日本においては、それを感じることも少ないが、その富裕層が今は大陸から来た中国人に多くを占められているのだろう。かつて中国に比べて自分たちが圧倒的に裕福だと信じていた香港の人々は、今、絶対に自分たちが手の届かないペントハウスを見上げ、そこに住む富豪のことを考える。

それは中国から来た富豪なのかも知れない。圧倒的に成長した中国の気配をそこに感じるのだ。香港人が中国に持つ感情は、表向きの民主運動だけでは語れないものがある。

ここにいる旅行者達は、今日のデモをどう見ていたのだろう。何気なく、今日はどうだったと聞いてみると、クラブで酔って騒いでズボンを破ってしまったとのこと。

香港の混沌はすべてを飲み込む。暴動も、日常も、羽目をはずした旅人のささやかな楽しみも。



『香港、深圳、そして武漢 — 抗議デモから繋がるもの、その行方』第2集

第1.0版 2020年6月20日

第1.1版 2020年6月21日